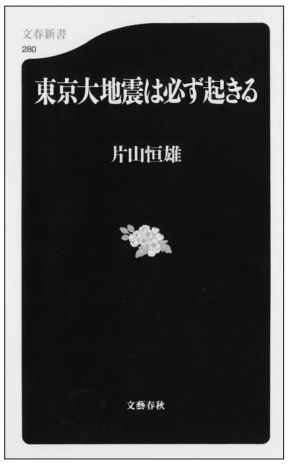
東京大地震は必ず起きる

片山恒雄=著

●文藝春秋　文春新書280
●2002年10月発行
●本体価格680円



[紹介者]
河田恵昭
KAWATA Yoshiaki
フェロー会員
京都大学教授

本書は，著者の地震防災に関する長年の学問的知見の蓄積と豊富な現場経験に基づいて，将来東京を襲う地震による被害をできるだけ少なくするという立場から各種の提言や問いかけが具体的になされた好著である。ノンフィクションやルポルタージュの分野からの同じようなタイトルの書物が散見される中で，工学的な背景に基づく客観的な記述は，都市地震災害がもつ冷たい現実を，むしろ淡々と伝えてくれる。土木工学者の基本的な姿勢がそこから浮かび上がり，特に都市地震防災を研究課題とする若手研究者や学部・大学院生に必読の書である。

さて，本書は7章構成をとっている。まず，第1章では都市災害としての地震災害のもつ特徴がまとめられている。そこでは，宮城県沖地震や阪神・淡路大震災におけるいくつかのエピソードを紹介しながら，安全神話の崩壊や「いつ」「どこで」「どれくらいの大きさ」という三つの要素を実用に耐える精度で地震予知することの困難さが示されている。そしてなぜ地震が最悪の都市災害であるのかについて，具体的な理由が明らかにされている。まえがきのところでの奥様の素朴な疑問の紹介といい，この導入部の書き方は秀逸である。思わず記述されている内容に引き込まれてしまう。整然と書かれていないことが，かえって読者につぎのエピソードが予見できないという魅力を与え，一気に読んでしまうことになろう。

第2章では阪神・淡路大震災につながる歴史的な記述である。読み進んでいくと，私が感じていたことと全く同じことを著者が気づいていたのを知ってびっくりした。こういう発見があるから自分の専門分野にかかわる書物を読むことが楽しいのである。1994年のノースリッジ地震や阪神・淡路大震災が起こる直前には，わが国のみならず米国でも，土木技術者は震災対策としてハード対策一辺倒では研究課題が先細りする，ひいては研究費が減少するという危機感をもっていたと断言してよい。だから，ソフト対策を絡めながら総合的に共同研究を推進する機運が育っていた。ところが，これらの地震が発生して，悪く言えば新しい土木工学的課題が大量に発生した。すなわち，地震防災分野の土木技術者は俄然元気になり，使命感も旺盛になったのである。研究費も増額された。著者はそのことには直接触れていないが，記述された文章の行間にそのことがうかがわれる。しかも，記述が正直である。ガス管や水道管が全体で何箇所が壊れるのかではなく，具体的にどこで壊れるのかを教えてほしいといわれて困ったという表現はその一例である。随所に正直に書かれた部分が見出されて好感がもてる。

第3章は東京の震災想定である。この章を読むのは少し苦労した。なぜなら，私は大阪生まれの大阪育ちで，京都や神戸のことはかなりわかるのであるが，東京の地名を聞いてもさっぱり情景が思い浮かばないのである。防災研究をやるには，基本的に土地勘のないところのことをやってはいけないと思う。東京の地名を聞いただけで，どのような歴史風土なのかを瞬間的に思い浮かべられないようでは危なくて被害想定などできない。だから，この章は著者のように長年東京で生活していることが理解の前提になる。しかし，東京都の震災想定に見出されるいくつかの特性を著者がみつけて解説するくだりは，研究者の楽しみを垣間見るようで思わず苦笑してしまう。そして第4章ではライフラインの重要性が詳しく指摘されている。この部分は何度も読み返す価値がある。少し物足りなかったのは，ライフラインのネットワークの問題点が少ししか触れられていない点である。ネットワーク全体がダウンするような被害が本当に起こらないのであろうかという疑問が残る。

第5章と6章は地震の発生前後の課題を阪神・淡路大震災の場合を例にとり，具体的に示している。ただし，震災の全体像というよりも，震災で表出した重要なトピックスの記述がなされている。それは事前対策としての住宅の耐震補強，地震保険，トップの意思決定，危機管理である。もっと書きたいという著者の気持ちが抑えられた記述になっているのを感じる。それは地震が起こってしまってからにも当てはまる。特に，立川の広域防災基地が詳しく記述されており，対策が着々と進められていることがよく理解できる。この章は著者の考え方がもっとも素直に紹介されていると判断できた。

第7章は若手研究者との対談であるか，専門性が強くなり，かえって読者にとって内容理解が難しくなってしまったのは残念である。

この本はまずザッと通読して，それから自分の興味がひきつけられたところを繰り返し読み，つぎに，あまりよく理解できないところに挑戦するというやり方で読めばよい思う。何しろ，防災のことを理解しようとすれば，かなりの生活体験や人生経験が必要である。頭でっかちだけではこの本を読みこなすことができないと断言できる。挑戦に値する書物である。